

沖縄の過去と現在が語りかけるもの

福島 利夫

はじめに

「沖縄」と言えば何を連想するだろうか。まずは、台風と米軍基地という、自然と社会の大きな二つの災害である。

次に、沖縄の人々のパワーである。たとえば、テレビの歌謡番組などを見ると、大阪出身者と並んで沖縄出身者の歌手がずいぶん活躍している。これらの地域からの出演者数が実際にどうなのかというよりも、少なくともその与える印象は大きい。その筆頭には、安室奈美恵が挙げられる。彼女のファッション・スタイルをまねる「アムラー」は、1996年の流行語となった。また、同じころデビューし、2000年に解散した4人の少女グループ「SPEED（スピード）」もそうである。どちらも、沖縄アクターズスクールがプロデュースしたものである。

テレビドラマでは、2001年度上半期NHK朝の連続テレビ小説シリーズの「ちゅらさん」がある。このシリーズでは史上初の沖縄県が主な舞台である。主演の「えりい」役の国仲涼子、そして「おばあ」役の平良とみと共に、小浜島も有名になり、ドラマの続編も放映された。また、近年では日本最西端の与那国島（ドラマでは、志木那島）をロケ地にした「Dr. コトー診療所」（主演は吉岡秀隆）も好評を博している。

全体として、女性が活躍しているイメージが強いのは、ゴルファーの宮里藍や2006年度準ミス・ユニバースの知花くららを見てもそうである。

このような、「沖縄」が発信するものは何か。反対に、「沖縄」に求めるものは何か。「沖縄」は、日本の中に存在する「異国」のような要素を確かに備えている。それはまず、亜熱帯の気候である。そして、大和民族とは異なっている。言語も、沖縄方言は母音が5母音ではなく、3母音である。OはUとなり、EはIとなるので、「よる（夜）」は「ゆる」に、「め（目）」は「み」になる。もっとも、日本にはいろいろな地域ごとの方言が存在するし、その昔には、日本語は5母音ではなく、8母音であった時期もある。

また、「異国」のような要素という点では、「北国」である北海道にも似かよっている。それは、亜寒帯の気候であり、アイヌを始めとした北方少数民族の存在である。

以下、「沖縄」が語りかけるもの、そして「沖縄」にとっての「過去」と「現在」について考察することによって、日本の「過去」と「現在」についても論じてみよう。

1 「幸福の島々」を訪ねて

「幸福の島々」とは何か。それは、もちろん筆者の名前（「福島」）のことではないし、また「日本列島」（島国）全体のことでない。全日空（ANA）後援の、ある旅行会社の沖縄「観光周遊プラン」パンフの表紙のタイトルである。正確には、「幸福の島々 沖縄」となっている。パンフを開いてみると、そこに登場するのは「美ら海（ちゅらうみ）」、「美ら島（ちゅらしま）」である。それはさらに、「優雅でゆったりと流れる島時間に浸る～どこまでも青い海とやわらかな風が私の心を開放する…。～」と続く。

このような「南国の楽園」というイメージの強調は、とりわけ「観光」サイドからすれば不可欠であろうし、それを頭から否定するつもりはない。しかし、今回初めて訪れた沖縄の印象には極めて重たいものがあり、単純に「楽園」と受け止めるには大きな違和感があった。はたして「観光」と「戦争」や「米軍基地」とは両立するものなのだろうか。どちらも非日常的な光景としては共通しているのかもしれないが、もっとも、沖縄に住む人々にとっては、それらは否応なく「日常」となっているようである。

観光バスのガイドさんが、「シマウタ」を紹介するのと同じように、米軍基地についても紹介する。その中には、2004年に起こった、宜野湾市の普天間基地に隣接している沖縄国際大学の米軍ヘリコプター墜落現場を見ることも含まれている。また、日本政府による、米軍に対するいわゆる「思いやり予算」（在日米軍駐留経費負担）によって、米軍基地の維持経費がアメリカ本国よりも日本国内のほうが安上がりとなるのでアメリカは大いに助かっているということも説明される。

ここでは、沖縄の自然と風土に感動させられることと、戦争の悲惨さと理不尽さ、米軍基地の存在の不自然さと危険の日常化が訴えかけられ、哀しみと憤りが有無を言わず迫ってくるのを感じさせられることが併存している。

2 「沖縄」との出会い

「沖縄」の「過去」という場合、私自身の「過去」における「沖縄」との出会いも含まれる。私にとって、「沖縄」というのは懐かしい存在である。私は大阪市内の西区で生まれ育ち、通った高校は港区にある。その隣の大正区は、現在も人口の4分の1が沖縄出身者と言われる地域である。沖縄の人名は地名をそのまま取っているらしいが、当然、クラスにも「嘉手納」君や「金城」君がいた。また、結婚当初は妻が大正区の小学校に勤務していた関係で、私たちはしばらく大正区に住んでいたことがあるし、義弟は大正区の中学校に現在勤務している。

大正区には、沖縄会館が二つもある。大阪沖縄会館と大正沖縄会館であり、とくに前者は大正区役所前の表通りにある。高校野球で、沖縄代表が出場する時には、大正区から甲子園まで応援のバスが出ると聞いたことがある。とりわけ、沖縄の本土復帰前には、交流の機会としても特別な意味があったように思われる。

大正区で行われている大きなイベントとしては、本土では盆踊りに当たる「エイサー祭り」がある。毎年、区役所前の千島公園グラウンドで9月半ばの日曜日に行われ、2006年で32回目となる。おそらく、本土復帰後に開始されたものであろう。

こうした環境の中で、私が沖縄についての本を始めて読んだのは高校生の時であった。私の高校時代、そして大学の学生時代には、まだ沖縄は本土に復帰しておらず、アメリカによって引き起こされたベトナムに対する戦争の出撃基地としての役割を持たされていた。当時、「沖縄を返せ」という大合唱とともに提起されていた沖縄復帰運動は、日米安全保障条約体制に反対する社会運動の構成部分となっていた。1972年の本土復帰、そして「沖縄県」としての再生はその後のことである。

3 沖縄の「過去」

沖縄の「過去」と「現在」の関係はどうなっているのか。この問いに答えるためには、近代以降の沖縄にとっての「過去」とは、そもそもいつのことを指すのかという問題がある。まず何と言っても、今次大戦時の最終局面で米軍の本土侵攻を遅らせるための「捨て石」にされた沖縄戦がある。しかし、本土復帰以前の時期をも「過去」と考えることもできる。戦争終結後に、米軍統治下に置かれるという形で、ここでも「捨て石」にされてきたわけである。さらに視野を広げれば、ソ連・東欧諸国崩壊以前のいわゆる「冷戦体制」を前提とした米軍の軍事戦略の時期を「過去」と見ることもできる。

「戦後」はまだ終わっていないと言われることもしばしばあるが、少なくとも沖縄では「過去」と「現在」が切り離せないのではないだろうか。英語で言う、現在完了形あるいは現在完了進行形として、「捨て石」の状態がずっと継続している。

沖縄の「過去」を語り、「現在」を問い、さらに「未来」に訴えかける建造物がいくつかある。まずは、佐喜真美術館である。ここでの最も有名な展示物は、丸木位里・俊夫妻の描いた『沖縄戦の図』であり、高さ4m、幅8.5mという巨大なものである。そして、この美術館が普天間基地の一部に食いこむような位置にあるのも大きな特徴である。それは、佐喜真道夫館長が米軍に接收された先祖の土地を返還させて、そこに美術館を開設したからである。さらに、美術館の屋上の階段の先に、6月23日の「慰霊の日」に夕陽が沈み、その光が階段正面から射しこ

むように設計されており、独特の外観を備えている。

次に、二つの平和祈念資料館がある。どちらも、沖縄本島の南端部に位置している。第1に、民間の「ひめゆり平和祈念資料館」である。設立したのは、財団法人沖縄県女師・一高女（沖縄師範学校女子部・沖縄県立第一高等女学校）ひめゆり同窓会である。沖縄戦の際に、両校の生徒222名・教師18名が看護要員として沖縄陸軍病院に動員され、自然洞窟を掘って造られた病院壕（ガマ）の中で働いていたが、戦火の中でそのうち生徒123名・教師13名が亡くなった。

開館に当たっては、生き残った同窓生の中から、「語り部」として「証言員」も置いたが、開館時の1989年には28名で出発したのが現在は15名となっている。私たちがお話をうかがったのは、1927年生まれの中里正子さんと津波古ヒサさんで、お二人とも沖縄戦当時は師範本科1年であった。病院壕の入り口に建てられた「ひめゆりの塔」を年間300万人が見学を訪れ、そのすぐ横のこの資料館には90万人の入館者がある。また、平和学習で2200校が来館し、そのうち80パーセントが県外からである。

第2に、沖縄県平和祈念資料館である。1975年設立のこの資料館は2000年に新しく建てかえられて、旧館にくらべて総面積が約9倍にもなった。しかし、開館に当たっては、いくつかの問題点もあった。新しい資料館は、平和祈念公園の「平和の礎（いしじ）」の北側に開館した。

「平和の礎」は、1995年に沖縄県が太平洋戦争・沖縄戦終結五十周年記念事業として、沖縄戦で戦没したすべての人々（24万人以上）の氏名を刻んだ記念碑（刻名碑）として建立したものである。なお、刻名碑は、大きく、①沖縄県民、②本土出身者、③米英国軍人、④朝鮮半島・台湾出身者に分類されている。この「平和の礎」と「平和祈念資料館」は、実はもう一つ「国



3月14日沖縄県立平和祈念公園 平和の礎にて

際平和研究所」と合わせて一体となって、「平和の発信地」を構成するものとして、前大田知事時代に「沖縄国際平和の杜（もり）」構想として計画されていた。ところが、途中で革新県政から保守県政に転換したことで、全体の構想は後退し、3番目の「国際平和研究所」は幻となってしまった。

もう一つの問題も、保守県政への転換が影響している。それは、県当局が資料館の展示内容を内密に大きく変更しようとしていることが、開館数か月前にマスコミによって暴露されて明らかになった事件である。たとえば、壕（ガマ）の中で避難民に銃剣を向けている日本兵人形の手から、銃剣を無くしてしまった。2000年の開館直後に開催される沖縄サミットで見せたくなかったようである。しかし、その結果大きな抗議運動が起こり、こうした変更は撤回された。

沖縄の「過去」と「現在」を取り上げているのは、もちろん以上の建造物だけではない。また、沖縄の「語り部」は「ひめゆり平和祈念資料館」の「証言員」だけではない。「沖縄」の島全体の存在そのものがいわば「語り部」となって、日本全体に、さらには世界中に、「戦争」と「平和」について発信をし続けている。

反対に、受信をする側の環境の好変化としては、沖縄修学旅行がしやすくなったことが挙げられる。一例として、1992年から東京都立高校の修学旅行に航空機の使用が認められ、沖縄へも行けるようになった。これは画期的なできごとである。そして、それに向けてのガイドブックも発行されるようになった。新崎盛暉・仲地哲夫・村上有慶・目崎茂和・梅田正己『沖縄修学旅行』（高文研、初版1992年、第3版2005年）や大城将保・目崎茂和『修学旅行のための沖縄案内』（高文研、2006年）などである。

4 沖縄の「現在」

ここでは、沖縄の「現在」をここ10年ぐらいに限定して取り上げる。まず、1995年9月4日に起こった米兵3人による女子小学生暴行事件である。戦後50年の節目の年を迎えても、「安全保障」を名乗る条約を根拠とする、沖縄の米軍基地の存在によって住民生活の「安全」がまったく「保障」されていないことが改めて大きな社会問題として噴出した。10月21日に「米軍人による少女暴行事件を糾弾し、日米地位協定の見直しを要求する沖縄県民総決起集会」が開かれ、会場である宜野湾市の海浜公園は8万5千人でうずめつくされ、復帰後、最大規模の集会となった。犯人の米兵3人は、1997年3月に那覇地方裁判所によって懲役6年半～7年の実刑判決が言い渡され、その後3人とも刑期を終えて帰国した。しかし、そのうちの1人は、2006年8月にアメリカのジョージア州で女子大生を暴行した上で殺害し、直後に自殺する事件もさらに起こしている。

上記の沖縄県民総決起集会からさかのぼる9月28日、大田県知事は土地の強制使用のための手続きの一つである「代理署名」拒否の方針を県議会で表明した。これは、軍用地として接収されている土地の地主たちが、米軍による土地使用を認める書類に署名することを拒否したことにもとづく「代理署名」である。正確には、地主たちが署名を拒否した場合、その代わりに市町村長の「代理署名」が必要となる。しかし、この時、那覇市長、沖縄市長、読谷村長は「代理署名」を拒否した。そこで、次に必要となるのが、知事による「代理署名」なのだが、これを拒否したわけである。そこで、政府は首相が「代理署名」をすれば軍用地を使えるように、「米軍用地特別措置法」を変えてしまった。

次は、2000年7月21日～23日に沖縄県名護市で開かれたサミット（主要国首脳会議）である。会議開催費用が814億円という、これまでに類を見ない巨額なものであったことが、貧困国の債務救済問題と絡めて批判された。ちなみに、前回のケルンサミットの費用は7億円であった。

もっとも、実は費用がかかっているのはこれだけではない。それは、二千年札の発行である。42年ぶりの新額面紙幣の発行は、サミット開催の直前の7月19日に行われた。「二千年（にせんねん）」に「二千元（にせんえん）」とは、残念なことにご本人はサミットに参加できなかった故・小渕首相の発案らしい。この二千元札は今となっては忘れ去られてしまっており、流通する「通貨」というよりは、一種の「記念切手」のようなものである。

二千元札の表側を飾っているのは、かつての琉球王朝のシンボルである首里城の坊門の一つである守礼門であり、正面の扁額に刻まれた「守禮之邦」とは「礼を重んじる国」を意味している。ここは、有名な記念撮影スポットでもある。

同じく、サミット開催の前日に、極東最大の嘉手納基地を2万7千人の「人間の鎖」で包囲して世界にアピールできたことは貴重である。なお、嘉手納基地の「人間の鎖」による包囲は、それ以前にも1987年と1990年に行われている。そして、さらに2007年5月にも行われた。

5 石垣島と憲法九条

今回の沖縄実態調査では、沖縄本島以外の島々も訪れることができた。その一つが、日本最南端の都市である石垣市（石垣島）である。石垣市は沖縄県下では総面積第2位、総人口第10位である。

その市街地の中心部にある新栄公園で発見したのが「憲法九条の碑」である。新栄公園は、道路をはさんで市立図書館と市民会館があり、また近くに市役所や消防署もある中心街に位置している。そして、竹富町役場も近くにあるし、少し歩けば石垣港の船着き場である。



写真1



写真2



写真3

写真1では、左手奥の遠景となっているが、よく見れば「戦争の放棄」という文字が目に入る。写真2と写真3は、もっと近くから写す位置を変えたものである。これは、日本の現実が倒れかかっているのを「九条の碑」がしっかりと支えていることを表している。この「憲法九条の碑」（「戦争放棄の碑」）は、「九条の会やえやま」が2004年11月3日に建立したものである。なお、那覇市には、すでに1985年5月3日に「憲法九条の碑」が建立されている。

また、写真3の右手奥に見えるのは、2007年3月2日に移設されたばかりの「弾痕の壁」である。これは、太平洋戦争末期の空襲による機関銃の弾痕が残る石垣島気象台の塀の一部を切

り取ったものである。この壁は1927年に設置されたもので、市街地に残されている数少ない戦跡の一つとされてきており、文化財指定候補にも挙げられていたが、老朽化が進んで危険なことから撤去が計画されていた。その結果、壁の一部が公園に移設されることになったもので、縦・横がそれぞれ約2mの大きさである。市教育委員会文化課は、「九条の碑」と抱き合わせる形で平和学習に活用することをねらいとしている。

さらに、この新栄公園には「世界平和の鐘」もある。これは、「戦争の悲惨さと平和の尊さ」を説くために、国連加盟国のメダルやコインから鑄造された「鐘」であり、ニューヨークの国連本部を始めとして、世界数か所に設置されている。日本では北海道の稚内市と石垣市にある。日本最北端と最南端の都市である。

そこで、もう一度写真1にもどってみる。写真中央に、円の中心を石垣島とした周辺の広域地図が示されている。そして、その上の方向を示す標識には、右側（東の方向）は上から稚内2820km、東京1950km、大阪1590km、同じく左側（西の方向）は上から香港1100km、台湾270km、フィリピン1220kmと書かれている。こうしてみると、左側（西の方向）のほうが近い、特に台湾が近いことがよくわかる。

平成の市町村大合併の強行とともに道州制導入が議論されているが、これを契機にして、道州制導入の是非とは別に、このような地理的な位置からしても「琉球自治州」構想が提起されることの意味は大きい。現在、「格差社会」化が大きな社会問題となってきているが、その格差の中には「地域格差」も含まれている。夕張市の財政破綻にみられるように、このことは沖縄だけの問題ではないし、また現在だけの話でもない。

井上ひさしは1981年に書いた小説『吉里吉里人』の中で、このテーマを扱っている。この小説は、東北地方の小さな一寒村（人口約4200人）が、日本政府による地方切り捨てと蔑視の政策に愛想をつかして独立し、「吉里吉里国」を設立し、そして破綻する話である。独立から破綻までの40時間が物語の舞台であり、また同時にこの小説を読むのにかかる時間も40時間という仕掛けになっている。そこには、東京弁とは異なる「国語」である「吉里吉里語」（東北弁）読本の紹介、自給自足経済、国際金融、軍隊、外交、議会、医療、障害者、性文化など多岐にわたる「吉里吉里国」讃歌が満載されている。「独立」するからには、これだけの視野の広さと工夫、気概が必要となるということなのだが、最後には失敗してしまう。しかし、失敗からも学ぶことはできるはずである。

6 沖縄と米軍基地をめぐるいくつかの数値

最初に挙げるのは、沖縄の面積についてである。47都道府県では、小さい順で、香川、大阪、

東京、そして沖縄であり、大きい順では44位である。沖縄県の面積は全国の0.6パーセント、人口は1パーセントである。この0.6パーセントの面積に、日本の米軍基地の75パーセントが集められている。つまり、残りの99.4パーセントの面積に、基地の25パーセントという配分である。この数値だけで十分ではあるが、最近よく話題にされるジニ係数を計算してみると0.774となる。

次に、5年ごとに行われる国勢調査の2000年10月の数値で外国人の国籍別人口を見ると、韓国・朝鮮52万9千人、中国25万3千人、ブラジル18万8千人、フィリピン9万4千人、アメリカ3万9千人となっている。しかし、この数値には大きな欠陥がある。外国人も調査対象ではあるが、大使館・領事館等の外交官およびその家族、そして軍人およびその家族はそこから除外されている。

梅林宏道『在日米軍』（岩波新書、2002年）で掲げられている、在日米軍司令部資料による計算では、横須賀・第7艦隊の母港軍艦の兵力も海軍洋上兵力として合計すると、2001年1月の在日米軍兵力は5万1578人である。この数値を上記の国勢調査のアメリカ人の数値と合算すれば9万人を超える。しかし、これは軍人のみの数値であって、その家族の数値は入っていない。さらに、アメリカ大使館等の外交官およびその家族を計上すれば、数値はもっと大きくなるはずである。つまり、国勢調査だけを見ては極めて不十分だということである。順番もアメリカ国籍は5番目となっているが、実際にはフィリピンを追い抜いているはずである。

最後に、沖縄で発行している民間の資料集を紹介しておきたい。それは、照屋学『沖縄市町村のカルテ～沖縄本島北部・中部編～』と『沖縄市町村のカルテ～沖縄本島南部・宮古・八重山・離島編～』の2巻（有限会社ニライ・カナイ研究所、2006年）である。

まず、書名のタイトルでは、「カルテ」の「カ」だけを大きな字にして、「力（ちから）」とも読めるようにしている。次に、発行元の「ニライ・カナイ」というのは、奄美・沖縄地方で古代から信じられてきた信仰によるものであり、はるか海の彼方に、この世に幸福をもたらす「ニライ・カナイ」があると信じられてきたところから来ている。

初めに、沖縄県を他の都道府県と比較した「沖縄県の力」（第1巻）と那覇市を他の県庁所在都市と比較した「那覇市の力」（第2巻）をそれぞれの冒頭に配置した上で、2006年1月現在の沖縄県下41市町村の数値と順位づけを、以下のように23の項目にわたって示している。

1. 面積・人口・世帯数、
2. 地目利用状況、
3. 地価平均価格、
4. 米軍及び自衛隊基地の現状、
5. 人口動態、
6. 年齢3区分人口、
7. 人口推移、
8. 単身世帯数、
9. 昼間の賑わい度、
10. 労働力、
11. 産業別就業者人口、
12. 農業力、
13. 工業力、
14. 商業力、
15. 住宅事情、
16. 下水道整備と普及状況、
17. 道路・公園の整備状況、
18. 自動車保有状況、
19. 保育所状況、
20. 経済力、
21. 財政力、
22. 職員及び議会議員数、
23. その他（理容院、美容院、

クリーニング店、ホテル・旅館等)

以上の項目で異色なのは、4. 米軍及び自衛隊基地の現状である。この項目は、基地面積、総面積に占める割合、基地を除く人口密度からなっており、さらに、基地面積は「基地面積計」、「米軍基地面積」と「自衛隊基地面積」に区分されている。これらの資料の出所は那覇防衛施設局、時点は2004年3月末現在である。そして、これらすべてに順位づけがされている。もちろん、基地が存在しない市町村（1市5町10村、計16）もあるので、順位としては25位までとなる。

県庁所在地の那覇市の数値を見てみよう。総人口はもちろん1位である。沖縄県全体136万人の中で、那覇市は31万人、つまり23パーセントを占めている。基地面積を除く人口密度も1位である。基地面積計の順位は14位だが、そのうち自衛隊基地面積だけでは1位である。そして、総面積に占める基地面積の割合は10.4パーセント、15位である。

総面積に占める基地面積の上位10位を挙げてみよう。1. 嘉手納町82.6パーセント、2. 金武町59.5パーセント、3. 北谷町53.5パーセント、4. 宜野座村50.7パーセント、5. 読谷村44.6パーセント、6. 東村41.5パーセント、7. 沖縄市36.1パーセント、8. 伊江村35.2パーセント、9. 宜野湾市32.4パーセント、10. 恩納村30.0パーセントである。

1位の嘉手納町が突出しているのには圧倒されるが、10位までの数値を見ても尋常な割合ではない。このように、広大な米軍基地が住民の居住空間の中心に常に存在し続けていることは、島全体が米軍の「不沈空母」として位置づけられていることに他ならない。

おわりに

沖縄の「過去」と「現在」について語ることは、日本の「過去」と「現在」、そして「未来」について語ることに繋がっている。かつての日本の侵略戦争を美化し、アメリカに追随してこれからの戦争を賛美する体制づくりを推進することが、「美しい国」(安倍首相)づくりであってはならない。沖縄も含めて、日本列島全体が国民生活から見て、「美ら島(ちゅらしま)」と呼べるようになりたいものである。

<参考文献>

本文で挙げたもの以外を発行年順で以下に示す。

1. 新崎盛暉・大城将保他『観光コースでない沖縄』第3版、高文研、1997年

2. 新城俊昭『高等学校 琉球・沖縄史』新訂・増補版、東洋企画、2001年
3. 中村政則編『年表 昭和史 増補版—1926-2003』岩波ブックレット、2004年
4. 伊波洋一・永井浩『沖縄基地とイラク戦争』岩波ブックレット、2005年
5. [記憶と表現]研究会『訪ねてみよう 戦争を学ぶミュージアム／メモリアル』岩波ジュニア新書、2005年
6. 琉球自治州の会『琉球自治州の構想』那覇出版社、2005年
7. 新崎盛暉『沖縄現代史 新版』岩波新書、2005年
8. 金城実『沖縄から靖国を問う』宇多出版企画、2006年
9. 矢野恒太記念会編『データでみる県勢 2007年版』矢野恒太記念会、2006年
10. 大学人九条の会沖縄編『沖縄から憲法九条をまもるために』でいご印刷、2006年
11. 安斎育郎『美ら島と米軍基地』（『ビジュアルブック 語り伝える沖縄』第4巻）新日本出版社、2007年
12. 安斎育郎『命どう宝のころ』（『ビジュアルブック 語り伝える沖縄』第5巻）新日本出版社、2007年